

学部長挨拶

狩野 陽

本日、これから「社会と情報に関するシンポジウム」を開催させていただきます。

お手元のプログラムによりますと、私の挨拶は30分も続くようになっています。それはあるべきではないことですが、実質的には下手な話は長くなる可能性もございます。暫く私たちの創立記念事業としてのこのシンポジウムの開催の辞をお許し下さい。

先ほど勝井教授よりお話しがありましたように、このシンポジウムは、学部と同じ齢を重ねて今日に至っています。今年のシンポジウムは、そのうえに、この札幌学院大学が創立50周年を迎えるその時期

に当たっております。50周年と申しますと、1946年あるいは47年、その当時は終戦直後で、戦地や工場や農村から生きて帰ってきた若者が世の中にもどり、その年嵩の人達が同志と語り、学問と教養を身につける場を作ろう、そういう情熱にかられて、札幌文化専門学院をつくり上げたのが始まりでした。

いわば徒手空拳で、仲間が集まり学生と教師を結集して学校をつくるという、事情は異なるにせよ、中世後期のヨーロッパ各地に大学が発生した基本的な一つの形態が今日のこの大学のもとになっています。当時、文系の高等教育機関のなかったこの札幌の地にあって、ほとんど唯一の、商学、法学、経済学と語学、総じて教養、自由学芸というものの源泉となりえたという自負が、この大学の伝統として今日につながっています。

その、50年ほど前というのは、歴史的状況として、さらに研究の流れで考えますと、とりわけこのシンポジウムにかかわる学問の動きでみますと、これは一つの転機でした。

それは、ヘーゲルが *Wissenschaft der Logik* の中で、初版の前書にいう *die Zeit der Gae-hrung* ふうふうと沸き立ち、新たな創造がそこで花開く発酵の時でした。それが今は沈静したかとも見えるという叙述でヘーゲルは論理学を書き始めるのですけれども、社会情報学にとってまさに発酵の時というのがこの時期、つまり本学創設の50年前ではなかったかと思われま

す。その当時、1946年、ペンシルヴェニア大学でENIACが完成し、von NeumannのEDVACのためのドラフトが作成され、1948年マンチェスター大学でMARK Iが完成しました。いろいろの仕組みが違っておりますが、そういう中で、多様な分野をつなぐ伝統にとらわれない論議がその当時行なわれていました。その試みの中で、いろいろな計算機やロボットが工夫され、私の古い友人である尊敬すべき先輩は、その当時、脳神経学の領域で、目標に向かって動き、状況を認知し適応を調整する一種のホメオステシスの機能をもつ虫のようなロボット、生きているカメによく似たロボットをつくり上げていますが、人間と機械を結ぶ沸き立つようなアイデアと試作の時期でした。

この間に、ノーバート・ウィナーのサイバネティクス、動物と機械の制御とコミュニケーションの理論、シャノンとウィーヴァーの「コミュニケーションの数学的理論」、アラン・チューリ



狩野 陽氏

ングのアイデア、認知と学習のニューロン集合の証拠を通じて心理学理論を構成したドナルド・ヘップの「行動の機構」が出ています。

この学部で社会情報学という領域の源泉になるような古典というべき文献の収集を計画していますが、それを担当する学部の大國さんのドラフトによりますと、この当時、1947年だったと思いますが、社会学の領域では、ホルクハイマーとアドルノによる「啓蒙の弁証法」がアムステルダムから刊行されています。

このような一連の活動の中で、社会の情報が成り立つ基本的契機である認知の側面で、それまでのパラダイムを転回する一つのシンポジウムが、アメリカのまだ小さい創立50年ほどを経た学生数が1,000人に満たないカルフォルニア工科大学のパサデナ・キャンパスで催されました。これがヒクソン・シンポジウムで、主題は、Cerebral mechanisms in behavior 行動の脳機構でした。このヒクソン・シンポジウムでは7人くらいの者が話をしているのですが、その最初の報告者は、ヨハン・ルートヴィヒ・フォン・ノイマンでした。ノイマンはのっけから、脳の中におけるコンピューターと、コンピューターをまた脳から考えるモデルを提示しました。それを受けて、神経学のウォレン・マッカロクは、脳の中の情報処理を神経の活動の細かい構造と機能に照応させ、マッカロク=ピッツの観念の論理計算を論じています。

私にとって第3の演者が最も重要でした。そのカール・スペンサー・ラシュレーはハーヴァード大学霊長類研究所で白ネズミの知覚弁別学習と脳切除の関係を精緻な実験データでつめてきました。このシンポジウムで初めて人間を含む高等生物の活動にある serial order, つまり経験の組成は一定の系列的秩序をなしていて、刺激反応の一对の対応ではない、例えばピアノを弾くにせよ、バイオリンを弾くにせよ、あるいは言葉をしゃべるにせよ、そこにはなんらかの系列的な順序を追った活動の一貫した秩序が成り立っていて、その進行は非常に早くて、前のものと後のものをつないでいくあり方というのは、その都度の反応処置ではなく、あらかじめ何らかの形で設定された秩序系、システムというべきものが働いている、それが心理学の基本的な問題であり、生理学がアプローチする課題であると申しました。

これは、意外なくらい反響を呼び、この小さなシンポジウムは、心理学だけではなくて科学史に残る画期的な学問の集会になりました。それは、行動主義の心理学のドグマが、崩壊していく一つのきっかけをなし、認知科学の誕生につながり、アメリカを中心にしていわば人間科学、社会科学に変動の波動が拡がりました。これを評価する側から申しますと、認知科学の誕生として、このヒクソン・シンポジウムが銘記されますし、また、他面において、従来のアメリカらしい簡単明瞭な行動というものに即した試行錯誤の経験を理論化する学習心理学を是とする考え方から見ますと、わけのわからない心理学の領域に入ってゆく一つの転機となったとみえます。そのわけのわからない領域にラシュレーは一步踏み外したことになります。しかし、その時に、インパクトは、いわば心理学を破壊するような状態で広がりましたがけれども、社会科学に関しましてはやや影響はとまどった状態で続いています。それから50年たち、さらにまた、ここ10年の間に社会情報学が、ほぼ一つの研究領域として主張を始めてまいりました。

このシンポジウムをこの大学で開始したときに、遠いながら念頭にあったのは、従来のパラダイムでは真の解決がえられない研究の共軛領域を各自の解明の方策を駆使して長く討論することを通じて、いつか解決の新しい糸口が生み出せないか、そういう願いがあったことは確かでした。

社会情報学の領域は、どのような形で建設されるかが、また一つのこれからの問題ですが、

しかし、それは新たな知的状況と問題と固有の解明の可能性の問いを投げ掛けていることだけは確かでありましょう。社会情報学が、現実の社会事実の科学となりうるには、その困難な事実直面せざるをえません。それは、これまでの社会学、心理学あるいは工学にいたる、そういう領域の中における問題とは違った局面を着目せざるをえぬ宿命をもつところにあります。

記号も情報も事実の実像や鏡映像ではない。しかも、それが、社会の情報という限り、知識としてカントが認識の学の可能性を考えた対象に限られるものではなく、認知し、影響され、伝達し、交流する、ありとある事象に関わらざるをえない。そればかりか、情報という語義には、意図的であろうとなかろうと、いかがわしく、曖昧で、何らかの形で嘘をつ

き、人間と社会と機械システムを攪乱し、障害と病態をもち込み、運び、ときとしてシステム自体を破壊する事実を含むことになりましょう。社会情報学にとっては、予め情報と雑音を峻別するのは難しい。さらに社会情報学が用いる概念系も理論も、やはり、ひとつの情報であって、社会情報学は、常に自ら自身を検討し、疑い、そして、つき崩す仕事をもつことの覚悟が要ります。この問題にぶつかったとき、始めて社会情報学が自覚的に情報の問題を扱ったといえるのではないかと思います。

今日の会合は、そういう意味で、異なる領域にある研究者が合して研究を提示し、しかも、肉声の及ぶ少数の範囲でゆっくりと討論できる、比較的珍しい機会ですので、あらゆる疑いと検討を共にしながらそこから生き残るものは何かをつめる行程として、今後の論議をお進めいただければ有難いと思います。

やはり、随分長い話になりましたが、このささやかなシンポジウムに、遠路、林先生、貝沼先生のご光来をいただき、そして北海道大学からお忙しい田中先生のご参画をいただき、本当に有難うございました。

また、この会合にご参集いただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

それでは、これから始めさせていただきます。

どうも有難うございました。(拍手)

